

# 社会科学の実践

Virtual

## 職業と学び—キャリアデザインを考える

講師：レンゴー株式会社 代表取締役会長兼社長 大坪 清  
神戸大学凌霜会・六甲台後援会 寄附講義「社会科学の実践」  
2017年1月27日（金） 於：神戸大学



皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました大坪です。

私は昭和37年に神戸大学経済学部を卒業し、住友商事に入社しました。住友商事ではいろいろな仕事に携わってきましたが、住友商事の取締役副社長、欧州住友商事会社の会長兼社長を務めていた2000年に、レンゴーからの要請を受けて社長に就任し、17年目を迎えました。

レンゴーは一部上場企業であり、日本の板紙・段ボール業界では最大の企業の一つです。一部上場企業で17年間も社長を続けているのは、非常にレアなケースだと思います。日本では、4年から長くて8年で社長が交代しています。なぜ17年間も社長を続けているかということは、後ほどお話ししたいと思います。

私は昭和33年の神戸大学入学当初から、将来の自分の職業をある程度意識していました。勉強はほとんどしませんでした。そういう方向で自分の意志を持ちながら、大学生活を送ってきました。

神戸大学ではバレーボール部に所属していましたが、日本の学校で初めてバレーボールを取り入れ、専門のチームを結成したのは神戸大学(当時の神戸高等商業学校)なのです。勉強もさることながら、4年間の学生生活のなかで、自分が伸ばすべきもの、趣味嗜好を考えることも大切です。

大学卒業後もずっと研究を続けていく方もいるかもしれませんが、就職を選択するということであれば、学びも大切ですが、それ以外の自分なりの趣味嗜好を持つ必要があります。私にとって、その一つがバレーボールでした。

私は2年生の後半にバレーボール部のキャプテンになりました。入部した当初は5部制の4部でしたが、私が卒業する時には1部に昇格していました。そこまでバレーボール部を強くしたことが、私の神戸大学での誇りです。学びで誇りを持つことも大切ですが、学び以外のところでも、努力することで神戸大学を有名にすることができたと自負しています。

先ほど申しあげたとおり、私はレンゴーの社長を17年間務めています。それ以外にも経済界や業界団体の役職にも就いています。その一つが、関西生産性本部の会長で、これも10年間続けています。皆さんも、生産性の向上とは何かということについても、考えていくべき時期にきているのではないのでしょうか。関西生産性本部では、神戸大学の先生方、神戸大学OBの方々にも、メンバーとして活躍いただいています。

それから、関西経済連合会の副会長も8年間続けています。私が神戸大学出身であるということで、関西経済界においても神戸大学をPRしています。

そのほかにも、太平洋人材交流センター(PREX)の会長も3年目になりました。ここでは、アジアを中心とした中進国、発展途上国の人材育成のために、JICA(国際協力機構: Japan International Cooperation Agency)のODA(Official Development Assistance)資金を利用した支援活動を行っています。



このように財界活動にも取り組んでいますが、私の本職はレンゴーの社長ですから、レンゴーグループの約15,000人の従業員の生活を、本当の意味でバックアップ、豊かな生活ができるようにしていく、ということを決して考えずしていません。

業界活動もその一つであり、例えば全国段ボール工業組合連合会の理事長、西日本段ボール工業組合の理事長、日本製紙連合会の副会長、JA包装園芸資材協会の会長といった役職も務めています。神戸大学のOB会である凌霜会の理事長も昨年引き受けたところです。

さて、私が会長兼社長を務めるレンゴーはどのような会社なのかということについて、英語で作成した紹介VTRを見てもらおうと思います。この英語が半分くらい分かったらいいと思いますが、それ以上分かるようにヒアリングをがんばってもらいたいと思います。

(紹介VTR視聴)

半分くらい分かったでしょうか? それ以上分かった人は手を挙げてください。

最近の若い人ははっきりと手を挙げませんね。日本がもっと強くなるためには、皆さんの年齢の方々がもっとパワーを持たなければなりません。間違っているとしてもよから自分の意見を主張する、それが間違っていたら取り下げればいいのです。意見を言わないというのが一番良くないことです。

それではレンゴーがどういう会社なのか説明しましょう。

1909年にレンゴーの創業者である井上貞治郎が日本で初めて段ボールをつくりました。これが日本における段ボール産業の発祥です。レンゴーは1909年に創業し今年で108年目になります。108年間で社長は5人だけで、単純計算すると一人平均20年は社長をしなければいけないということになり、これが先ほど言った、なぜ私がレンゴーの社長を続けているのかという大きな理由のひとつです。

レンゴーが取り扱う商品、あるいは業界の性質からいって、社長がころころ変わるべきではない、と考えています。レンゴーは1909年に創業し、資本金310億円、売上高5,325億円（2016年3月期）、従業員数14,000名弱（2016年3月31日現在）という規模です。従業員数は、現在はもっと増えており約15,000名で、2017年3月期の売上高は5,500億円を超える見込みです。レンゴーグループ各社の単純合算の売上高だと、7,100億円を超える企業群ということになります。



レンゴーは、ゼネラル・パッケージング・インダストリーとして、総合的にパッケージングを提供することができる企業です。製紙、段ボール、紙器、軟包装、重包装、海外の6つの事業をコアビジネスとしており、これをヘキサゴン経営といっています。先ほどの紹介VTRの中でも「Hexagonal business」という表現が出てきたと思います。製紙は、段ボール原紙を主につくっています。それから段ボール原紙を加工し段ボールをつくります。そして外装箱である段ボールケースの中に入るパッケージを紙器といいます。先ほどの紹介VTRにも出てきた「Folding carton」です。缶ビールなどの6缶パックで用いられるマルチパックもつくっています。

それから、軟包装、重包装も取り扱っています。

軟包装のなかで一番皆さんに関係があるのは、おにぎりの包装でしょう。コンビニエンスストアなどで売っているおにぎりのパッケージは、シートを切り取ると海苔が自動的におにぎりに巻きつくようになっていますが、あのフィルム包装は、レンゴーのグループ会社である朋和産業が特許を持っています。例えば、セブン-イレブンでは1日に1,500万個ものおにぎりが販売されています。それからサンドウィッチの三角形のフィルム包装も同じく朋和産業の特許です。これも1日に800万個近く販売されています。

それから重包装で皆さんが見たことがあるのは、フレキシブルコンテナでしょう。東日本大震災の福島第一原発事故で発生した汚染土の一時保管に用いられていますが、あのフレキシブルコンテナをつくっているのもレンゴーのグループ会社である日本マタイです。これはベトナムで生産したものを輸入しています。

レンゴーグループの拠点配置について、国内には約140拠点あります。海外には123工場21拠点あり、国内と海外を合わせると300近い拠点数となります。このうち国内の工場については、年間20工場は訪問しています。

財務状況ですが、右肩上がりです。2014年3月期に当期純利益が減少しましたが、それ以降は右肩上がりです。順調に伸びています。

レンゴーは1909年に創業し、1972年に社名を聯合紙器株式会社からレンゴー株式会社に変更しました。

その後、M & Aを重ねて事業を拡大し、2009年に創業100周年を迎えました。2011年には、かねてからの念願であった、アメリカ本土への展開を視野に入れた投資として、ハワイに段ボール工場を設立しました。昨年にはトライウォール社を子会社化し、2019年には創業110周年を迎えることとなります。

**"Less is more."**  
レンゴーが考えるパッケージング・イノベーションの基本

**"Less energy consumption"**

エネルギーの消費はできるだけ少なく

"軽薄炭少"から  
進化&深化

**"Less carbon emissions"**

二酸化炭素の発生はできるだけ少なく

**"High quality products with more value added"**

より付加価値の高い高品質な製品づくり

レンゴーの環境経営のキーワードは"Less is more."です。ギリシャのパルテノン神殿が"Less is more."の基本となっています。どういことかということ、アーキテクト(建築工学)が基本になっているのです。建築工学では「用・強・美」が求められます。「用」は効用、「強」はStrength、「美」はBeautyです。それを兼ね備えている建築物がパルテノン神殿なのです。逆に言えば、パルテノン神殿を分析していくことで「用・強・美」が導き出されるのです。「用・強・美」を英語に変えて建築用語として使いたしたのが"Less is more."です。この"Less is more."を、建築用語ではなくパッケージ業界で活用していこうということで使いました。

"Less energy consumption(エネルギーの消費はできるだけ少なく)"、"Less carbon emissions(二酸化炭素の発生はできるだけ少なく)"、"High quality products with more value added(より付加価値の高い高品質な製品づくり)"、これらは非常に重要な言葉であり、環境のキーワードであるだけでなく、会社全体の経営そのものが"Less is more."に帰結すると考えています。

先ほどお話したとおり、私は関西生産性本部の会長を務めています。経営学を学ぼうとしている人にとって一番重要なことは、生産性をどのようにして向上していくか、ということですが、生産性(Productivity)とは一体何なのでしょう。間違ってもよいので、大きな声で答えてみてください。

学生：「時間あたりにどのくらい価値のある仕事ができるかということだと思います。」

1時間あたりどのくらい価値のあるものをつくれるか、ということは、何をつくるために投入していますか？

学生：「生産物です。」

経済という言葉はよく耳にしますが、では経済とは何なのでしょう。

学生：「人々が生産したものを交換する場だと思います。」

基本的なことをまず自分のものにしておくことが大切です。1、2年生のうちに基本的なことをマスターしておく、これが後々とても強い戦力になってきます。

私は神戸大学在学時、ほとんど勉強しませんでした。しかし、基本的なことだけは人に負けないように、学校で教わるというよりも自分で勉強していました。

そもそも「経済」という言葉がどこから生まれたかという、福沢諭吉が英語の「economy」を「経済」と翻訳したのが始まりです。中国の古典に出てくる「世を治め民を救う」という意味の「経世済民」の「経」と「済」をとって「経済」という言葉にしたのです。「経済」という言葉はそもそも「経世済民」からきているという基本的なことを知っておかねばなりません。

それではその経済において、生産活動を行う、ものをつくり出すためには一体何が必要でしょうか。

学生：「資本が必要だと思います。」



基本的なことですが、「経済」とは我々が財とサービスをつくり出すことです。財とサービスをつくり出すために必要なものが土地と労働と資本であり、これが生産の三大要素です。労働と資本を投入し、それをいかに財として復元させるか、ということが生産性の一番のポイントです。労働と資本をインプットし、アウトプットとして財とサービスを得るということが生産であり、これが経済の基本となります。このような基本的なことが分かっていると、経営学部でいくらB S (Balance Sheet : 貸借対照表)やP L (Profit and Loss Statement : 損益計算書) について勉強しても、何も進みません。勉強するにあたっては、まず基本をマスターしてほしいと思います。

少し話がそれましたが、“Less is more.”の基本には「用・強・美」があります。“Less”については、エネルギーの消費をできるだけ抑え、二酸化炭素排出量をできるだけ少なくしていくということであり、“High quality products with more value-added”、この“value”が最も重要で、財というのは一種の“value”ですから、“value”をいかに“added”していくのか、ということが基本となります。

段ボールには、Aフルート、Bフルート、Cフルートなど、厚みによっていろいろな種類があります。そのなかで、私が社長になってからつくり出した新しい段ボールがΔ(デルタ)フルートです。

レンゴー スマート・ディスプレイ・パッケージング(RSDP)は、サービス産業の生産性を向上するために開発したもので、段ボールを開封すればスーパーなど店頭の陳列棚にそのままディスプレイすることができます。

“Less energy consumption”の実現のため、太陽光発電や再生資源の活用に取り組んでいます。福島矢吹工場では必要なエネルギーの3分の1を太陽光発電で賄っており、金津工場では蒸気タービン、尼崎工場ではガスタービンで自家発電を行っています。新名古屋工場では輸送面の効率化を図るため、できあがった製品を自動で出し入れするラックビルシステムを導入しています。

八潮工場ではバイオマス発電を行っており、朋和産業では揮発性の薬品を回収するマテリアルリサイクルを行っています。日本マタイでは廃棄物RPF(Refuse Paper & Plastic Fuel)化設備を設置し、廃材・廃液を全て再利用しようという取り組みを行っています。

段ボールの原料のほとんどは古紙です。皆さんが使った後の段ボールを回収し、再び段ボール原紙をつくり、段ボールケースにしています。板紙のリサイクル率は約94%で、世界でも日本が最高の水準にあります。



レンゴーは、原紙から段ボールの全てでFSC®森林認証(Forest Stewardship Council)を取得しています。FSC森林認証は、適切に管理された森林や、その森林から切り出された木材の適切な加工・流通を証明する国際的な認証制度で、レンゴーの段ボール製品が持続可能な森林資源の保全にも貢献することが第三者機関により認められたこととなります。

我々が考えなければならないのは、つくり上げたvalueを一般の方々とshareすることができるシステムをつくり上げていくことです。CSV(Creating Shared Value)としていろいろな試みを進めています。

日本は南極へ毎年観測船を出していますが、荷物の梱包には冷凍しても大丈夫な段ボールが使われており、それらを全てレンゴーが寄付しています。

安倍政権のもとで、女性の活躍推進、働き方改革への取組みが進んでいますが、これは非常に重要なことで、日本人の働き方は、他国、特に先進国に比べて遅れている部分があり、そして女性がもっと社会へ出て働くことができる社会全体のシステムをつくり上げなければならないと思います。

レンゴーでは、大学新卒採用の少なくとも3分の1は女性です。当社のビジネスにおいてはデザインは非常に重要な要素ですが、デザイン・マーケティングセンターという部署のメンバーの大半は女性です。これが大きな効果を発揮しており、例えば今まで広告代理店に発注していたユーザーから、どんどん注文をいただいています。

皆さんはレンゴーという会社をあまり知らなかったかもしれませんが、レンゴーが社会に貢献する企業であることを理解してください。



これからの時代は、どのような時代になっていくのでしょうか。私が言い続けているのは、今年以降しばらくの間は「VUCAの時代」が来るということです。「V」は「Volatility(変動性)」、「U」は「Uncertainty(不確実性)」、「C」は「Complexity(複雑性)」、「A」は「Ambiguity(曖昧性)」で、これらの言葉で表されるような時代に入ったのではないかと考えています。

「Volatility」とは、揮発性がある状態、火を点けたらぱっと燃えてしまうような状態を指しており、トランプ大統領の誕生が最も分かりやすい例だと思います。

それから「Uncertainty(不確実性)」がどんどん増しています。不確実性が増しているということについていえば、神戸大学の社会・人文学系の皆さんが、本当の意味でがんばっていかねばなりません。数字だけで物事を判断すると、かえって間違える可能性があります。そこで必要となるのが、人文系、社会系であり、これを基本に学ばなければならないと思います。

「Uncertainty(不確実性)」を本当の意味でしっかりとつかむことが必要です。リスクというものは数字の計算でつかめるかもしれませんが、リスクを乗り越えたCrisis、危機、これは数字ではつかめません。そのために戦争が起こったりするわけです。それを抑止するためには、社会・人文学系である皆さんが、本当の意味の「人間社会はどうあるべきか」をさまざまな方面から分析していく必要があります。

それから「Complexity(複雑性)」、世界が非常にComplex(複雑)な状況にあるということです。

そして最後に「Ambiguity(曖昧性)」です。これは、答えは一つではなく二つも三つもあるという、非常にAmbiguous(曖昧)な状態であり、そのなかでどれをチョイスするのが問題になってくる、ということです。

1980、90年代から、レッセフェール(laissez-faire)、自由放任主義が行き果てたところに、金融工学、要するにお金だけを動かして利益を得ようとするという発想が出てきましたが、これは果たして正しいことなのでしょうか。人間に必要なのは「Numeracy(基本的な計算能力)」と「Literacy(読み書き能力)」、これらをアルゴリズム

△(algorithm)といいますが、数字だけを扱ってはいは、物事は絶対に解決しません。

デカルトが見つけた「虚数(imaginary number)」というものがありますが、金融工学ではこの虚数を用いて物事を動かしています。

プラスとプラスを掛けるとプラス、マイナスとマイナスを掛けてもプラスになるのが数字の基本です。ルートマイナス1という数字が世の中にあるのか、というところから考え出されたのが虚数です。宇宙に関する計算を行うために必要となるのが虚数ですが、金融工学の一部では、虚数を利用しています。

このように、「VUCAの時代」に対応していかなければならないということ認識してほしいと思います。

その基本は、「The speed of thought」思考回路をできるだけ速くすること、「Expect the unexpected」想定できない状態を想定すること、それくらいの能力を持たないと、Ambiguous(曖昧)な状態には対応できません。

そのような時代に入ったという前提のもとに、学生の皆さんには、キャンパスライフにおいてこのようなこと(勉学、語学、社会科学、読書、歴史、趣味、スポーツ…)に取り組んでもらいたいと考えています。



凌霜会の「凌霜」とは、菊をたたえた漢籍にある言葉で、神戸高等商業学校初代校長である水島鍬也先生の命名であり、「凌霜雪而香(凌霜を凌いで香ばし、人生の試練に耐えて 菊のように香り高く 美しかれ)」と記された記念碑があります。

皆さんは「商神」という歌は歌えますでしょうか（「商神」：神戸大学前身の旧制神戸高等商業学校時代の明治39(1906)年につくられた学友会歌）。「凌霜」、「商神」、このようなことについてもぜひ知っておいていただきたいと思います。

福沢諭吉『学問のすゝめ』の冒頭“天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず”、ここまでは皆さん覚えていると思います。その後ろの“と言えり”が非常に重要で、その後を読んでない人が多いと思います。



“広くこの人間世界を見渡すに、かしこき人あり、おろかなる人あり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、下人もありて、その有様雲と泥との相違あるに似たるはなんぞや。”

雲泥という言葉はここから生まれています。

“その次第はなほだ明らかなり。『実語教』に、「人学ばざれば智なし、智なき者は愚人なり」とあり。されば賢人と愚人との別は学ぶと学ばざるとによりてできるものなり。”

ただし、  
“学問とは、ただむずかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を楽しみ、詩をつくるなど、世上に実のなき文学を言うにあらず。されば今、かかる実なき学問は先づ次にし、もっぱら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり。”  
と続きます。

要は、実学、すなわち読み書きそろばんができるようになってくれ、ということです。「Literacy」と「Numeracy」です。今の日本社会で、この二つ以外、むしろそれよりも皆さんを支配しているのは「Videocy」ではないでしょうか。「Literacy」、「Numeracy」ではなく、物事を全て画面で判断してしまうということになってきています。実学、実語教に戻って、自分がすべきことは何か、ということをごぜひ今一度見直してください。

“山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。”

これは非常に有名な夏目漱石『草枕』の出だしです。その後、  
“住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画が出来る。”

と続きます。

ここで一番のポイントは、“安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画が出来る。”という部分です。つまり、物事を悟るという努力が大事だということです。そういう瞬間を皆さんが学ぶということが、非常に重要なことだと思います。

日本の有名な書籍、文書は非常に参考になりますし、文章そのものも美しく、物事の考え方も、そこから勉強できると思います。

ビデオやテレビばかり見て「Videocy」にどっぷり浸かり込むのではなく、活字を読む努力をすることが非常に重要な時期になってきており、「VUCAの時代」に対応していくためには、それがどうしても必要だと思っているので、ぜひ皆さんに理解してもらいたいと思います。皆さんのこれからの奮起を大いに期待します。

GPI  
△ GPI

< 学生の皆さんに取り組んでいただきたいこと >

**アダム・スミス『国富論』**  
"An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations"

"division of labor" 分業論  
"an invisible hand" 見えざる手

**アダム・スミス『道徳感情論』**  
"The Theory of Moral Sentiments"

"sympathy" 憐愍の情  
"sentiments" 感情  
"morality" 道徳  
"ethics" 倫理  
"philosophy" 哲学



17

先ほど申しあげたとおり、学生時代はほとんど勉強せずに、バレーボールばかりしていました。唯一自慢できるのであれば、アダム・スミスの『国富論(An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations)』を原書で読んだことです。

読み終えた当時はあまり内容が頭に残っていませんでしたが、社会人になり色々な経験をしていくにつれ、「あの時読んだのはこれか」ということが思い浮かぶようになり、『国富論』を今度は日本語で読んでみると、なるほど、アダム・スミスの考えはこういうことだったのか、と理解することができました。

『国富論』は「分業論(division of labor)」から始まります。ピン工場で、全ての工程を一人の職人が行くと一日かかって10本しかつくれるが、10人で作業を手分けすれば4,800本つくることのできる、という書き出しで、これが分業論の基本です。

第2巻の4章にでてくるのが「invisible hand(見えざる手)」です。アダム・スミスが『国富論』を著した当時の時代背景には、ヨーロッパ全体で見られたマーカンティリズム(mercantilism: 重商主義)社会がありました。それも単なる重商主義ではなく、“mercantilism with military force(軍備をもって重商主義をやっていく)”ということでした。

私はこの「invisible hand」という言葉が大好きです。各個人が、自分が必要だと思うものをつくり出すという経済活動が、見えざる手によってどこかで結ばれていて、結果として社会全体がプラスになっていく、そのような社会をつくり上げていく必要がある、というのが、アダム・スミスが言う「invisible hand」の基本となる考え方です。

アダム・スミスの出現によって初めて古典経済学(classical economics)が確立されるわけですが、その後、デヴィッド・リカード、アルフレッド・マーシャル、ヨーゼフ・シュンペーター、ポール・サミュエルソンといった経済学者によって、全てを数字で計算する経済学に変えていったわけです。

しかし本当の経済学というものは、数字では割り切れない面があります。アダム・スミスは『国富論』では一切数字を使っていません。サプライサイドカーブ(supply-side curve)とディマンドサイドカーブ(demand-side curve)が交差するところでバランスし、需要と供給が均衡する、ということは言っていますが、実際の数字は使われていません。私はこれが本当の経済学の基本ではないかと思います。先ほど言ったように、経済学あるいは経営学を発展させて、数字が全てということで金融工学につながって行って、使わなくてもいいような虚数まで使って計算しています。それが経済である、ということにすり替わっていきましたが、本当の経済においては道徳的な観点が重要となります。

アダム・スミスは『国富論』より前に『道徳感情論(The Theory of Moral Sentiments)』を著していますが、そのなかで彼が強調しているのはシンパシー(sympathy)です。シンパシーは一般的には「共感」と翻訳されていますが、私は「惻隠の情」という言葉が最も適していると思っています。そして、Sentiments(感情)、Morality(道徳)、Ethics(倫理)、Philosophy(哲学)、これら5つの要素を兼ね備えて経済をつくり上げていかなければならず、非常に重要な要素として、公平な判断をしなければならない、ということを彼は言っています。本当に正しい判断かどうかはImpartial(公平)なInspection(検査)によらなければならない、としており、それが最終的に何につながるかというと、Tolerance(忍耐)です。これが最終的には、一般的に訳されている「共感」という言葉につながっていくので、Toleranceを持ったSympathy、Sentiments、Morality、Ethics、Philosophyが必要になってくる、ということが、アダム・スミスの経済原論の原点であると考えています。

私は、『国富論』の原題『An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations』の「wealth」という言葉が非常に重要な意味を持っていると思います。

我々の業界でも「W to W」という言葉を使っていますが、どういう意味かと言いますと、「waste(廃棄物、無駄)」を「wealth(富、財)」に変えていく、「waste to wealth」ということです。

この言葉は非常に重要ですが、皆さんが、アダム・スミスの原論から、あるいは古典経済学のオリジンからスタートすると非常に考えやすいと思います。最初から現在の経済学や経営学に取り組むよりも、アダム・スミスの考え方がどういうことか、ということを理解しながらスタートするのがよいのではないのでしょうか。

< 学生の皆さんに贈る言葉 >

GPI  
ISE

「3つのS」  
Simple (物事は簡単に考えること)  
Speed (物事を進めるにはスピードが重要)  
Self-Confidence (自立+自律、自分自身に自信を持つ)

「強い頭」  
“賢い頭”よりも“強い頭”を持つこと  
“強い頭”と“3つのS”を備えること → “矜持”

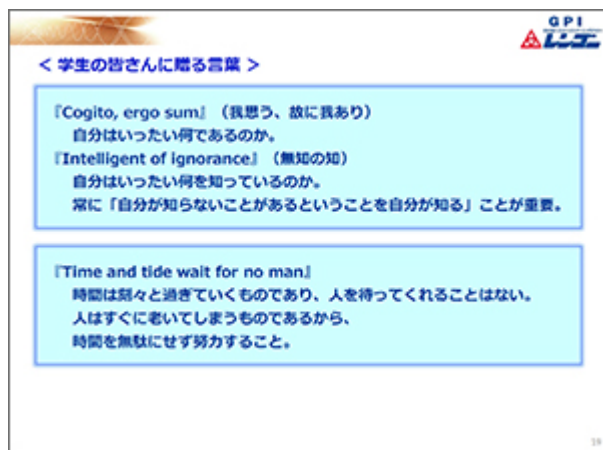
「五感をはたかせること」  
五感をはたかせることにより、能力を強いものにしていく。  
“強い頭”を作るためには、五感をフルにはたかせる必要がある。

38

物事を考える際に必要となるのは『3つのS』です。それは「simple」、「speed」、「self-confidence」です。そして、「賢い頭」ではなく「強い頭」を持ってほしいと思います。「強い頭」とは、自分の考えを具体的に表現することができ、そして間違っていればそれをきちんと修正できる、そのような強い意志を持った頭のことです。一方「賢い頭」とは、先のことばかり色々と考えて結局何もしない、という頭のことです。それが「賢い頭」だとすれば、そんなものは必要ないと思っています。

皆さんには、ぜひ「強い頭」を持つ努力をしてほしいと思っています。

「五感」とは、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚ですが、そのなかで皆さんに一番鍛えてほしいのは視覚です。私が昔から親しくしていた方が戦時に潜水艦の機装兵をしていたのですが、潜望鏡が一回りする約1分の間で周囲の状況全てを頭に入れてしまう、ということをやっとやっていました。彼の造語ですが、その力を瞥見視力といい、自分の周囲を一瞥するだけで状況を把握する力です。皆さんにも、できるだけ瞥見視力を鍛えてほしいと思っています。



『Cogito, ergo sum』という言葉は皆さんも知っていると思いますが、誰が言った言葉か知っている人は手を挙げてください。

学生：「デカルトです」

その通りです。デカルトのどの本に出ていましたか？

学生：「分かりません」

「方法序説」です。読みましたか？

学生：「読んでいません」

70ページほどの本なので、読んでみてください。内容を全部理解する必要はなく、これはこういことを言っているのか、ということが大体分かればよいです。

英語に訳すと「I think therefore I am.」、「我思う、ゆえに我あり」という意味です。

彼は、全てをまず疑い、言っていることが本当に正しいのかわかりかねないまま、そのように物事を考えている自分がここにあるということに気付き、それによって物事に対する判断が進んでくる、ということを知っていきます。

哲学的な発想、道徳的な発想、倫理的な発想、それらの一つの原点になる言葉が、この「Cogito, ergo sum」です。同じような意味の「Intelligent of ignorance(無知の知)」という言葉がありますが、誰の言葉か分かる人はいますか？

学生：「ソクラテスです」

正解です。自分はいったい何を知っているのだろうか。自分が知らないことがあることを知るとい、この「無知の知」を知ることによって、彼はディベートにどんどん勝っていくわけです。

皆さんがディベートをする時に、これは自分は知らない、ということをつかたうえでディベートするのと、そうではなく思いつきでディベートするのでは全然迫力が違って来るわけです。「無知の知」を分かりながらディベートに参加していくということが非常に重要なので、ぜひ覚えておいてほしいと思います。

私はロンドンに約4年間駐在しており、当時はちょうどサッチャー首相が政界を引退する頃でしたが、彼女は「Time and tide wait for no man」という言葉をよく使っていました。

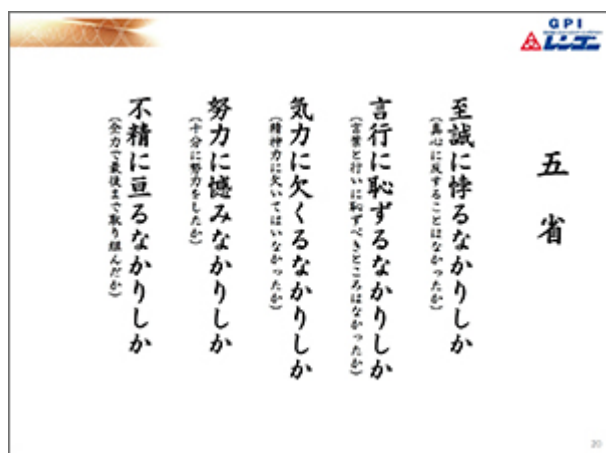
ロンドンを流れるテムズ川は流れが速く、また干満の差が約28フィート(約8m)と非常に大きいのが特長です。そのようなテムズ川の激しい一面を思い起こすと、イギリスには非常に強い一面があることに気がきます。

昨年行われた国民投票で、イギリスはEUを離脱することになりました。もともとイギリスはユーロという通貨には参加しておらず、あくまでもポンドを守り続けたので、有り得る選択だと感じています。

イギリス自身がEUを離脱しても自分たちは生きていけると大きな自信を持っているのは、主なコモディティの取引単位がヤード・ポンド法である、ということが大きな要素になっていると考えます。

例えば原油の取引単位はバレルです。金の取引単位はオンスです。このように主な取引単位がイギリス発祥であるということに、イギリスは大きな自信を持っています。

イギリスは第4次産業革命に向かう過程で若干行き詰っていますが、今回のトランプ大統領とメイ首相の会談によって解決策が見えてくるのではないかと考えています。



私が最後に皆さんに贈りたい言葉は「五省(Five Reflection)」です。

「至誠に悖るなかりしか(真心に反することはなかったか)」「言行に恥ずるなかりしか(言葉と行いに恥ずべきところはなかったか)」「氣力に欠くるなかりしか(精神力に欠いてはいなかったか)」「努力に憾みなかりしか(十分に努力をしたか)」「不精に亘るなかりしか(全力で最後まで取り組んだか)」、これはいい言葉でしょう。

これは江田島の海軍兵学校に伝わっている言葉ですが、敗戦後に海軍兵学校を訪れたアメリカの海兵隊が、こんな良い言葉があったのか、と持ち帰り、英訳して今もアナポリスの海兵隊の本部に掲げてあるということです。

この言葉を皆さんに贈って、私の講義を終わります。どうもありがとうございました。